アイドントノー一點張りで相手にしてくれぬ。よく捜して置いてくれ間違つて一個賣りで誰かに賣つたかも知れないからと、ちやんと相手にも躰面上の遁げ道をつくつておいてさてコースを一と廻りする、引きかへして見ると矢張り七個のまゝで、何んといつてもとんと要領を得ない、もう時間もなし水かけ論で際限もない、しかし球は内地へかへれば二十五圓こゝでは十五圓六十錢である、別に一打だけ求めてかへらうと、今度は卓上にある黒印のシルヴァー・キング入りの箱を指し、それを求めようといふと、オーライとばかりに事務員がその箱を前に差しだした、蓋をあけると黒の薄紙に包んだ球が七八つならんでる中へ亡くなつた番號入りの赤の薄紙包みの球がたゞ一個まぎれてあるではないか、その時に一言の文句をいふ間もなく、素早く事務員はその赤紙の球を僕の赤紙の分の箱の方へほり込むのだ。いよ〳〵いかないなと諦めると、そこは支那式に沒法子である、仕方がないと觀念して、文句なしに右の箱から左の箱へと球をほり込む、こゝにも支那特有の個性が現はれてゐるとおもつた。





## 旅の者

最後にはつきりいひ添へて置たい事は、恐らくかうしたキャデキーなどの不愉快な行動は、地元のメムバーは多く知らぬかとも思ふ。我々は旅の者である言語が不自由なものである、これにつけ込んでの話である。吾々は歐米を旅行しても土地言語に不案内であるため、どれだけ氣を悪くしたことか分らない、歐大陸では處在お金のお釣りを貰ふ時によく誤魔化されたり、贋金をつかまされる、以太利の汽車の旅に驚いたのは手荷物を持つてる人達は皆交代に食堂にゆく、外國人ばかりかとおもふと土地の人又しかりである。手際よくマカロニーを口中に運んでる地元の人達も、帽子洋杖手かばん皆食堂まで持ち込んでる。トランク携帶の僕は同行のM・S君と交代で食堂にでかけた。

恐らく日本へ觀光にくる外人も、ガイドやその他汽車電車の乘り降りから、ショッ

ピングをしても飲み食ひをしても、かなり不愉快な目に遇ふのではあるまいか。

言語不案内の旅人として支那のキャデキーに感情を害する位は、そう〳〵仰山に氣にするまでもないかもしれぬ、しかしそこには支那には支那らしい個性がはつきりつかめる、僕はちかごろの日本では公明正大なるべき政治が、中央に地方に表に裏に凡て金が物言ふやうな氣がして、何んとなく我民族の將來につき懸念されるやうな氣がしだした、同時に支那に旅してこの民族の將來もかなり憂慮すべきものありとおもはれてならない。同時にこの國民性の動きは對支外交とかぎらぬ、すべての對支問題につき考へられねばならない、しかもそれは對支ばかりでない凡ての對外にいや凡ての對内にも！　（昭三、十月號經濟往來）



# 乃木寺とゴルフ

## 一、乃木寺へ御寄附

萩の葉は、はやうす枯れて散りほうける、つゝじは青と黒と赤とつきまぜたような赤茶けたどす黒い葉をそよがしてゐる。山一面の小松林には、ところ〴〵に櫨の木が眞紅に炎えてる。池の汀には紅葉せる櫻が四本五本、火の色に匂ふてゐる。

小松が岡にしつらへた小つぽけなゴルフの練習場で、朝あけの空を仰ぎつゝ、苦樂齋は鬼一老とポン〳〵とクラブで球をテントへ叩きつけてゐる。

そこへ女中が見えて、廣田村の軍人會の連中だといふ、井野さんと外に二人の方が御目にかゝりたいといふて見えられてますといふ。

『鬼一老、井野といふ内があるかね？』

『えゝあります。井野といへば此村で一番古くて名望家ですよ。まああの村では名を賣つてるのは井野か吉村でせうな。』

『さうか？　それではそちらの庭の卓子のところへ案内して置いてくれ！』

井野と云ふ男であらう、四十格好な眞赤に日にやけた如何にも軍人あがりらしいのを先頭に、三人の村の男が卓子をとり卷いて、池の邊の紅葉した櫻をうしろに、ベンチに腰をかける。

村の名望家だと云ふふれ込みに、苦樂齋の夫人の心添えであらう、女中が座蒲團をはこんで來る、あとから菓子皿が出る、紅茶の小皿がくばられる。

井『いやどうかお構ひないやうに、手前が井野で……』

苦『や、かけちがひ失禮してゐました。何分一つ村といふても山の上と下では平素は疎遠がちで……』

井『今日は誠に好いお天氣で……』





苦『好い天氣ですな……それで御用といふのは？』

井『實は生駒の山つゞきにある乃木寺の修繕の費用の中へ御寄附を願ひたいので……』

苦『乃木寺？　此村とどんな關係があるのですか？』

井『えゝその藤澤南岳先生の孫さんが肝煎されてゐまして、村の軍人後援會の連中が參詣しては、いろ〳〵世話になりますので……』

苦『それだけですか？』

井『へえ、それだけですが……まあ中山さんもお願ひをしまして……』

苦『いや、さうした事ですと私もお斷りをします。ことに差出たことだが、中山君の方は猶のこと遠慮して貰はぬと、只此山に別莊があると云ふので、なにか寄附といふと中山中山ではね……』

井『へえ……』

苦『私の日の出社の方でも私へよくさうした申込がありますが、お斷りをしてます。

もと〳〵お金が天降つたり地から湧くわけでもなし、これが此村の事なら次第によつては御多分に洩れませぬが……』

井『いや御尤もです。さぞ先生方へはうるさい程四方八方から申込む事で御座いませうね。』

苦『何分近頃は忠君愛國を業として飯を喰ふ連中が多い、主旨はよろしいとしても、それにたづさはる連中は眞面目でない、どうして眞面目どころか丸でそれを喰ひ物にする。そこへ公卿華族さんのなんとか子爵だとか、豫備陸軍の中將何のなにがしとか云ふ連中が、知つてか知らずか看板にかつぎあげられる。氣の弱いものは御無理御尤で心にもなく金をしぼりとられる……』

井『えゝ、どうもさうしたのがだん〳〵多くなりましたようですね。』

苦『やれ慈善とかやれ救濟とか、名義もよろしい中には眞面目な手合もある、がその仕事が旨くゆくかといふとかなり問題となるものが多い。念の入つたのになると、もともと寄附金のあつまりだけに、會計がづらうになりがちとなり、使ひこみも少くない。』





井『へえ、さうした事件も折々新聞に見えますな。』

苦『社の方でも毎日かうした連中に襲はれる、はつきりと斷はるとそれならばだれだれに御紹介をといふ、事柄の是非は二段として、君にさへ今はじめて會ふものが、そのはじめての君を他へ紹介といふ、さうした無責任なことは僕には出來ないとはつきり斷はることにしてゐるがね。』

井『全く先生だちの御紹介となりますとさきでも迷惑ながらいきなり突つぱねるとも參りますまいからね。』

苦『何もその乃木寺がよいわるいといふでもなければ、又君達を疑ふのでもなんでもない、まあその位の事は一と目見ても僕には見わけがつく。』

井『いや御尤な事でして……』

苦『まあ社の方はかうした事か就職運動などが僕だちの重な用事でね。』

井『全く御忙しい事で……』

## 二、紐育のパブリック・リンク

乙『午前は少しおひまでもおありですか、今日も御在宅で……』

苦『僕らの仕事では午前が休養の時間となるのだね……』

乙『毎朝ボン〳〵と好い音がいたしますな。』

苦『毎朝この山へ來るのかね？』

乙『え、折々中山さんの方へお伺ひいたしますので……』

井『ゴルフも流行ものになりましたやうで……村でも山の手へゴルフ場が出來てくれると景氣がよくなりますが……』

丙『けれども旦那のような方でないとさう誰もかれもやれない樣ですな。』





苦『さう、たしかに日本では今のところブルヂョアのスポーツに相違ないね、しかしそのブルヂョアとしてから、碁や球突で部屋の中にこもつたり中にはお茶屋などで發展するより、ゴルフの方が安あがりで早寢早起になる、健康にも懷工合の下痢止にもならうといふのだ……あれで外國のやうに手輕に安直にプレイできると一層いゝのだね。』

井『へー、外國の方が手輕に？』

苦『さう……一番物價の高いと云はれてゐるあのアメリカでも、會員組織のクラブの外に澤山のパブリックリンクがあるな。』

井『パブリックリンク？』

苦『まあ公衆用一般用とでも云ふのか、誰でもそのリンクへでかけてクラブと云ふ棒も球もかしてくれて自由に遊べるな。』

井『いくら位とります？』

苦『普通五十仙だから日本の一圓、中には二十五仙日本の五十錢一枚といふ處もある。』

井『何時間位つかへます？』

苦『一日遊んでもよい。時間に制限なしだね。』

井『時間に制限なし？』

苦『さう一日つゞけようと云ふてもつゞけられるものでもない。兎に角、圓タクに乘つて一日かけ廻つても一圓と云ふようなものだから全く安いものだね。』

井『それで便利な場所にでもあります？』

苦『輕便だとも……それが市中なり又ほど遠くない處にある。近頃は紐育などでは下町の眼貫の場所に出來たね。』

井『あの廣々とした……』

苦『そこはアメリカ人だな。大きなデパートメント・ストアの屋上へこしらへたね。』





井『へえ――そんな事して勘定に合ひますか？』

苦『合ふとも、數でこなすからな、まあ一種の大量生産だね。しかもアメリカ人の平均一人當りの所得は年額約四千圓と云ふのだから、日本人の二百六十八圓に比べて八倍近い。だから紐育で二十五仙の入場料といへば東京で六七錢位にしか當らないわけだね。』

井『それでは大變なちがひですな。』

苦『だから外國詰で銀行や會社などにつとめてゐたクラーク階級の連中は、外國では手輕にゴルフをエンジョイできたのが、クラブの袋をかついで日本へかへつて見ると、內地のゴルフ場へはそばへもよりつけない。まあ近頃東京のむつみとか大阪の寶塚などは割安の方だが、まだこんな事ではとても民衆的とはいへないね。』

井『どうしてそんなに高いですやろ？』

苦『そりや第一地價が馬鹿に高い。すべての物價が割高だ。日本と云ふ國は凡て品は

悪くても値段だけはとてつもなく高くしてあるのだから。』

井『あの辨慶の七つ道具のようなもの、あれだけでも大分金目のものですな。』

苦『あれも日本だと稅だけで倍になるから、一揃ひがどうしても二百圓三百圓になるがアメリカなどでは五六十圓で用が足りる。向ふ岸の上海でも半分もかゝらぬ。それで例のパブリック・リンクが市中にあつて、五十仙であつたか一弗であつたか、それで手輕に遊べるやうになつてる。まあ考へて見給へ。近頃は一寸活動小屋に入つて、薄暗い中に小さくなつてるてもすぐ圓助はとられるからな。』

井『全くですな。さういはれて見ると安いものかも知れん。』

苦『それは安い。そして一日廣つぱで日光消毒をうけて筋肉のさび落しか出來る。』

井『先生はお口が旨い。しかしいくら旨うてもさうしたお話しでは私らはそのクラブとやらをつかむ折は無ささうですな。』

苦『さあ……近頃大阪の新放水路になつとる新淀川には淀川の分水口から海まで川中





に廣々とした野原がある。何百萬何千萬坪と云ふのであらうな。あの野原にリンクをつくる、近くて手輕で地代もいらない。』

井『でも水の出た時は？』

苦『その時は年に一度か二度だ。我慢するのさ。水が引けば又はじめるまでだよ。』

井『地代はたゞで……』

苦『さうさ、たゞさ。どうして水のはけをよくするため葦や草を刈るだけでも大變な金がかゝる。リンクにすれば大阪府では刈る手數と金が浮いてくるわけだね。』

井『なるほどね。さうなつたら私らもはじめる事になりますか。』

## 三、かきたいといふ皮膚病

乙『あれは練習とやらに大分かゝりませうな。』

丙『先生のやうになるのは大抵な事で御座りますまい？』

井『先生は矢張りあつちでお始めになつたのですか？』

苦『左様、かれこれ十年ほど以前臺灣でクラブと云ふあの棒を握つてから、それから臺灣の淡水、箱根の仙石、倫敦のヘンドンにフオレスト・ヒル、羅馬のアクア・サンタ東京では駒澤、六實、程ヶ谷、大阪では茨木、鳴尾、寶塚と先づ十一か處の道場を荒らして來たな。』

井『世界中武者修行をなさつたわけで……』

苦『左様、その代りほんのクラブを握つてリンクを廻つたといふわけで、どのクラブ場でもまだ一か處に五回以上出かけたところはない。』

井『いつも内でおけいこで？』

苦『いやおけいこもしない。丸つ切りから下手でグリーンの芝生をかつとばすといふ、おなじ荒すにしてもまあむぐらのお仲間だね。』

井『乙』

丙『ハ、……』



苦『日本へもどつてからは少しゴルフでもやらうと思ふてゐたが、何分社の仕事は不規則であり、宅に居ても早寢するのが惜しくて夜ふかしをする。そこへ筆をとるといふ道樂がかうじる。新聞雜誌から書籍類などに眼を通すにいそがしい。』

井『へえ――いやもう先生は忙しい中てどうしてあゝ澤山お書きになるかと申しましてな。』

苦『ところで社中の同人の中からも、どうか筆を止めてくれと親身に忠告してくれる。わしの返事は四十越えての色狂ひは止まらないといふが、五十越えての筆狂ひはとても止まらない。今おれに筆を止めろといふのは死ねといふ樣なものだと云ふてね。』

井『へえ――筆がとれぬと死ぬ!?』

苦『さうだ、死ぬね。尤も潮時といふものがあるから、その中に自分から飽いてくる事もあらう。又世間から飽きられてくると云ふ事もあるだらう？』

井『と云ひますと？』

苦『君達は岡本逸平と云ふ漫畫の先生を知つてるかね。』

井『え……漫畫ではあの人だけはずばぬけてますね。意匠構圖といひ……それにあの筆は天下逸品ですな。』

苦『だから逸平といふのだよ……あの人にいつか話した事がある。「どうも君のやうにどの雜誌にもどの雜誌にもあゝ豆にかけたものだね。」といふと、おうむ返しに「そりやあなたの事でしよう」と云ふ。「いや〳〵どうして君の方がずつと手廣くあきなつてるよ。あれでは過勞になりはしないかと案じてる。」といふと「いや、さう思はないでもないが、矢張り人間にはそれ〴〵人氣の立つ時がある。それだけに又立消える時があるまあ今人氣の立つてる間に馬力をかけられるだけかけて置かうと思ふてる。」と云ふたが、これは一面の眞理があるね。』

井『さうしたものですかね。』



苦『況んや當方が草臥れる感興がなくなる飽いてくる時がくる。まあ油の乘つてるときにはやるだけやるのだな。そこで一昨年の暮に病氣になる。輕度だが糖尿の氣もある。お醫者さんからはあまり過激な運動はさけてくれ、テニスもスキーもやめてくれ、山登りも無理をしてはいかぬ、と云ふのでゴルフの方も練習の鼻の先を折られる。今年になつてからは更に皮膚病にかゝる、これも消化器の故障からしい。この方は兎に角痒ゆくて痒ゆくて仕方がない、第一夜の目もろく〳〵眠れなくなる。秋風も立つて來た。あまり汗ばまなくなつたから、この一と月ほど前からかうして天氣なら毎朝三十分なり一時間クラブを振る事になつてゐる。おかげでと云ふてよいか、そろそろ早寢になる。くたびれるから筆をとる方の時間がだん〳〵少くなる。此鹽梅ではこれからゴルフの爲に筆の運びがうんとのろくなりさうだね。』

井『さうなりますと太く短かくといふのが細く長くなるといふわけですかね。』

## 四、聽講料の代りに聞かせ賃

苦『全くその通りだ。まあ君達はなんぞといふと寄附々々と云ふ、さうした時は僕なども第一線に祭り上げてくれてありがたい樣だが、資力といふ上から見て君達とどちらが強いのか分らない。』

井『いや御戯談を……』

苦『戯談ぢやない、全くだ。世の中には公債とか株式とか土地とか家作とか持ち込んで、持主の代がいくら代つても、收入にさした動きのない階級もあれば、工場を持つてるとか商賣をしてるとかある仕事をしてゐる、主人が代つても相當經營する腕利が居て仕事がつづいてゐくのもある。さうかと思へば一般の勞働階級のやうに、又僕のように、自分の健康だけが唯一のもとでで、ことに僕などは死んだらあとで趣味のちがふ僕の子が代はれるはずもない、たとへ生きてゐても中氣とか老朽とかいふ樣な理由で仕事がとれなくなるとばつたりと行きつまる。つまり頭も體も健全であるといふ事が資本で、病氣になる死んで仕舞ふとなれば、丸で火の消えた樣になるからね。』



井『まさか……』

苦『まさかにも事實だから仕方がない。だから僕等が汗水かいてかせいでる、そのかせいでる間にしぼれるだけしぼつてやれとこられては全く閉口だね。』

井『いやそんな事は……』

乙『先生も中々御口がわるい。』

丙『話が少々ゐげつなうなりましたね。』

乙『いや色々と長話しましてそろ〳〵失禮さして貰ひましやう。』

丙『いや色々と長話しましてそろ〳〵失禮さして貰ひましやう。』

井『おかげとゴルフの話も聞かして貰ひまして……さあ御暇しやうか』

まあ一寸待ち玉へといひながら、ベンチをはなれて家の中へは入つた苦樂齋は再びもとの坐になほり、手にした狀袋をその一人の手に渡して、

『僕はくりかへしていふが、この村の住人だから此村のことなら事柄によりては隨分の寄附もしてよろしいが、君達の申出は頭から問題にならない。これは極めてわづかだが、しかしこれは寄附ではない。君達が山の手までわざ〳〵出かけて來る、頭から斷はられた上にさん〴〵ゴルフの說敎まで聞かされたでは少々お氣の毒である。聽講料といふのがあるが、これはまあ聞かせ賃だよ……』

井『いや、先生に聽講料をさし上げると云ふ事こそあれ、聞かせ賃をいたゞいては……』

苦『いや、さう遠慮するがものはない。ほんの眞似だけだ。遠慮せずに受けて呉れ給へ。』

井『どうもあまり……』

乙『さうですか……それちや折角の御思召ですから――』

丙『どうもありがたう。』

井『いろ〳〵と御休養の中を御邪魔しまして……』

苦『左樣なら。』

一同『左樣なら。』

× × × × ×

## 五、乃木寺の正體

寄附勸誘者の襲擊とゴルフの講釋で時間を潰して面喰つた苦樂齋は、今日は關西日の出會の會合日と云ふので、客がかへると身仕度して大阪へいそぐ。

社の大廣間に日の出會の午餐會食が開かれる。食卓についた苦樂齋は『今朝は乃木寺勸進の連中に襲はれて』と口を切ると、眞向にゐた芦屋の住人である同僚立川老が立『あゝそれやかたりですよ！』

苦『かたり!?』

立『軍人會の連中と云ふたでせう。』

苦『その通り。』

立『藤澤南岳がどうこうと云ふたでせう。』

苦『その通り。』

立『そこへ參詣していろ〳〵御世話になりますのでといふて……』

苦『さうですよ。』

立『この間芦屋で甲野がやられる、乙田もやられる、丙山はうまく撃退したさうだが、軍人會といふのと、連中がその村々の一と通り事情を心得てかゝるから、つひうつかり釣り込まれるらしい。』

苦『さうか……それぢや一杯やられたか。』

立『君、出したのかい？』

苦『出したよ。』





## 小山内君の名を借りて

### 上、御大老と近松と山陽

小山内薫君と僕とは見ず知らずの仲ではない、といふて君の爲めに追悼文を筆にし追悼講演を口にすべくあまりに緣が薄かつた。

しかるに大阪の朝日會館に於て土方與志君に引つ張り出され、君の追悼劇「夜の宿」の演出前舞臺に立つて追悼講演をする事となつた、既にしやべる以上その思ふところを筆にするに不思議はない、いや有りようは君の名を借りて世間に訴へたい心持ちがあるだけに口よりは筆の方がよい。

山來日本といふ國では藝術に對する理解がまだ乏しい？　乏しい？　とでもいふのであらう、若し千家のお茶ぢやないが、表と裏とあるならば表の理解ばかりで裏の理

解がない、若しお經の文句でもあるまいが小乘と大乘の別ありとせば、小乘の理解ばかりで大乘の理解がない。

そりや日本人も同じ人間である以上、高級萬歳を見てゲタ〳〵と笑ふ、安來節を聞いて手拍手を打つ、浪花節を聞いてベソをかく、況んや長唄常盤津清元に於てをや、更らに義太夫歌舞伎に於てをや。

先代萩といへば御殿、千本櫻といへば壽司屋、一の谷といへば陣屋、菅原といへば寺子屋位の事は先刻皆樣御承知である、それならその名作を筆にした作者は誰かといへば、十に九人といひたいが十人までは小首をかしぐ事とおもふ。

作者は知らなくとも太夫は知つてる役者は知つてるといふかも知れぬ、いかにも男子といはず殊には婦人達はよく知り過ぎてる、花環や緞帳も贈る酒席に侍らせて酒ものます飯もくはすポチもやる、しかしそれはたゞあの役者が好きだとか贔負だとかいふまでで、ここに所謂理解なるものではない、もと〳〵役者も徳川時代には河原者と



して人外のやうに取扱はれた位である。

目前の權力實力は古今東西を通じて羽振りを利かしたがる、憲政の下今日でも大臣閣下といふ事になれば、送り迎ひのお祭り騒ぎはさらなり、至るところ御揮毫をと紙や布をならべる、エライ人はウン〳〵と御揮毫になる、氣の早いのは右から左と表裝して額にする軸にする、更に氣の早いのは大臣も長い事ではないと、先きを見越してそのまゝすてゝ置く、他日値が出るときまではうつかり手を出さぬらしい。

徳川時代の老中は今の大臣、大老は首相とも見られよう、その幾何十幾何百の大老老中の御筆先が、今どれだけ額や軸になつて殘つて居るのであらう、勿論その當時のお殿樣のお墨付と、くらべものにもならなかつた賴山陽の零簡寸墨でも近松門左の院本の反古でも、今日となれば千圓萬圓の金で飛んでゆく、さうした藝術の人達の命は死後長くなるほど次第に値も出てくる、現代にエライ人はやゝともすると生きてる内に名が消えたがる、だからまあ羽振りのいゝ内だけなと持てはやしてあげんと氣の毒

やといふのかも知れない。知れても知れなくてもそれはよろしい、兎に角日本では藝術に理解の薄い事は事實である。

それなら理解に厚いといふはどんな事か、八年程前の曾遊地歐米で見聞したところによつても、メキシコ政府は世界一の聲樂家であつた伊太利のカルソーが來た時は、二日間であつたか國立劇場に招聘して、廣く市民に無料でカルソーの肉聲を聞くの喜びを共に分つたといふ。又メキシコの詩人ネツボが南米チリで客死した時には、チリ政府は特に軍艦二隻を仕立てネツボの遺骸を載せメキシコに送つたとある。

巴里でモリエールの記念祭があつた、そこには朝野の名士はことごとく參集した、大統領も首相も版に押したやうな弔詞を朗讀したのではない、眞にモリエールを理解して言々肺腑よりいでたる弔辭を述べた。更らに伊太利のナポリでは間口二間半ばかりの音譜を賣つてマリオの家をたづねた、ここで賣られる主なる音譜は有名な Reginda de Pieve であつた、伊太利が世界大戰の渦中に卷きこまれ、國を賭して墺太利



と戰ふた時、マリオは愛國の歌レゼンダ・デ・ピエーブを作歌作曲した、此歌はいかに第一線に突進せる勇士の血を湧かした事であらう、いかにその背後に立てる國民の士氣を激勵した事であらう、既に戰終りて無名戰士の靈を弔ふ時、伊太利全國の歌舞音曲は停止となつた、但し伊太利の國歌とレゼンダ・デ・ピエーブは停止から除かれた、除かれたばかりかマリオは一代華族のバロン男爵を授けられた。

マリオの身柄をいひ殘したが彼はナポリの郵便局の一配達人に過ぎなかつた、郵便配達人が男爵になる、これが日本であつたら飛んでも無い話だと眼を廻はす人があるかも知れない、しかし配達人であらうがゴミ溜の掃除人であらうが大きに御世話である、その人の作つた歌謠は何萬の軍隊にも中將閣下や大將閣下の功績にも劣らなかつたのである。

日本でも詩人が亡くなつたら軍艦にのせるべし配達人も男爵にすべしとはいはぬ、たゞ外國では藝術に對してどこ迄理解してるかといふ例を擧げて見たまでゝある。

## 下、昭和三年の日本の七の大きな出來事

僕は昨昭和三年間に起つた出來事の中に七つの大きな事件、忘れられぬ事件があると思ふ、世界列國の代表が等しく朝見した御即位の大典が其一である、積年の宿題であつた普選の實施が其二である、身長は低い體重は輕い壽命は短い日本人が、アムステルダムの國際オリムピックで陸上競技で第六位となつた、水上競技で第二位となつたまさに、其三である、日本の譽れ世界の誇りである野口英世博士が熱帶の荒原で人道の犧牲となつて其職に斃れたまさに其四である、更に其五としては坪内逍遙先生の早稻田學壇の引退とその記念としての演劇博物館の創設をあげたい、其六として始めて日本の歌舞伎を歐洲の首都に演出して成功した市川左團次君のロシヤ行をあげたい。そして終りに其七として小山内薫君の死をあげたい。

詩、小說、戲曲、評論、紹介、飜譯に於ける筆の人としては他にも其人がある、しかし或は新派劇の顧問として、或は自由劇場の創設者として、或は市村座の顧問として、或は松竹キネマ研究所長として、或は築地小劇場の創設者として、我劇界に新らしき道を開拓せるパイオニーアたる小山内君、更らに日本映畫建設の先覺者であり、ラヂオ・ドラマの先驅者であり、更らに我歌舞伎劇を歐洲に進出せしめたる小山内君は、至るところに第二第三の小山内君を生み殘していつた、小山内君の劇界のあらゆる方面に通ぜる絕えざる努力活動に至りては他に其例が無い。

僕は小山内薫君の追悼會に文相閣下の弔詞の代讀がないのが遺憾だとも何んとも思ふてゐない、小山内薫君が從六位勳六等にならなかつたからといふて殘念閔子騫とも何とも思ふてゐない。

現内閣の首相田中大將は劇を好む、あの忙しい中に折々芝居見物してる誠に結構である、その位の餘裕はなくてはならぬ、さうしたところに人情味もある、しかしたゞ「澤正の忠次は勇ましいノオ」とだけでは物足りない、野口博士の追悼會にも逍遙博

士の演劇博物館の式にも首相の顔が見えぬ位だから、何にも小山内君の追悼會に首相の參會を求めもせぬ豫期もしない、しかし閣議の席で小山内薫が死んだそうなといふ一言すら話題にも上らない、恐らく話に上つてもロシアから國賓となつて招待された小山内君の名も「聞いたような名前ヂヤノオ」「壯士俳優らしいよ」位で片付けられるようでは理解が無さすぎると思ふ、赤穂義士がエラければ忠臣藏の作者もエライ、その社會に及ぼす力の如何に強いか位は考へてほしからうぢやないか。

しかし小山内君は日本始めての劇場葬となつた、築地小劇場では君の遺骸は中央觀覽席のたゞ中を、役員同人諸君の手により肩により、靜々と花環を以て埋められた舞臺の中央に運ばれた、そこには滿場立錐の地なきまで會葬者が群をなした。或る文人は尾崎紅葉山人の葬儀以上である、空前の盛儀であるといつたとの事である。又現に大阪では朝日會館に於て君の追悼劇は早くより切符の前賣は賣れ切りとなり、演出前一時間に亘り追悼の講演を續けた、いづれも我國としてはまさしく破天荒である。



ものも見方である、空前である破天荒であると恐悅してもよろしい、しかし眞に日本の劇の改善革新となり、それが世界的となりて進出するには、朝野をあげて今數十歩藝術の上に理解を進めてもらはねばならぬ。分かり切つた事ではあるがこゝに君の追悼に名を借りてくど〳〵しくも筆にして見た。（昭、四、三、文藝春秋）

# 梅田ステーション

## 上、奥の奥にかくれた電報受付口

梅田のステーションの待合室には入つた、發車の時間にまだ二十分ばかりある、ベンチに腰をかけて待ちわびてゐると、ふとさる用件を思ひうかべた、電話といふわけにもいかず郵便では間に合ひそうにない、さうだ電報だ〳〵とそのあたりあちこちうろついて見たが、大きな梅田のステーションである、一二等の待合室にも三等の待合室にも、公衆電報受付口らしい窓口は見えない、これぢや梅田の郵便局までかけねばならないか、さりとては不便至極な事だなあとぼやきながら表玄關のインクワヤリーの前にくゐると、

公衆電報受付口は驛長室の隣りにあります。





と張り出してある、やつと公衆電報受付口の處在が分明になつたといひたいが、今度はその驛長室なるものがどこにあるか、さつぱり分らない。

切符を賣る窓口で驛長室はどこですかとたづねると、表へ出て上りの三等待合室の前から乘客の出口の前を東へつき切り、荷物をあつかうてる建物の前をぬけて左に曲つた奥にありますといふ、片手に雨傘をさし片手に革袋をぶらさげながら、ぬかるみをつま立てて教へられたまゝにとぼ〳〵と出かけて見ると、まさしく驛長室なるものがある、大大阪の大玄關が呑吐する何萬何億の乘客方の九分九厘九毛までは、弓矢八幡御承知もあるまいがまさしく驛長室なるものが奥深く鎮坐ましましてゐる、その入口にならんで公衆電報の受付口がある、賴信紙を貰つて用件を書きつける、さて今度は料金相當の切手を貼らねばならない。

切手はといふとこゝでは賣りませぬといふ、それではどこにと問ひかへすと待合室の小賣店で賣つてるといふ、こゝに於てか又えつちらおつちらぬかるみ道を引きかへ

し、今着車したと見えて出口からあふれ出る老若男女、それに入り亂れて人力車メン、タキシーの助手、ブー〳〵とあわたゞしく動きそめる數かぎりない自動車、その間々をぬうて上りの三等待合室にたどりつく、かなり込んでる賣店でやつとの事で切手を求める、又々驛長室の隣なる公衆電報受付口に引きかへして、やつとの思ひで電報一本が受け付けられた。四度公衆出口前のぬかるみをつま立て、雨傘をさし革袋をぶら下げ、もとの待合室にたどりついたときは、全くやれ〳〵とほつと一と息にも二た息にも十息をついた。

歐米のステーションではいづこへいつても公衆の待合室に鐵道切符の賣下口にならんで電報の受付口がある、郵便の受入口がある、乘客はほつねんとまち合してる間に手紙や葉書をかく、電報をうつ、中には何時何分に乘車する下車する、或は一汽車乘りおくれた、同行者がふえたいや無くなつた、曰く何、曰く何、丁度待合してる間に電報により行きちがひの無いやうに安々と手順がつけられる。觀光客などは此間よく





暇潰しをかねて名處繪葉書などを知人のもとへとしたゝめる。

それが我大大阪の大關門たる梅田驛に於て、その郵便受入口は待合室にはない、電報は前申上げました通り遠い〳〵場はづれにあつて、しかも中々見當がつかない、付いても切手一枚求めるに又一と往復せねばならない、トランクや荷がさな物でも持つてる時は、みす〳〵荷物の番人を誰か隣り合せの人にでも賴んででかけねば用は足せない、その不便さや實に至れり盡せりである。

## 下、驛長兼郵便局長

公衆の利便といふ事を考へてる歐米では、同時に官廳自體の利便といふ事も考へてる、白耳義では鐵道のステーションの建物の中に郵便や電信や電話の設備のあることは御多分に洩れないが、郵便もたゞ普通郵便を受け入れるポストばかりでなく、書留とか小包とか特種の取扱もする、いな之ればかりではない爲替貯金の受拂までやる。

まだ〳〵之ればかりでない、鐵道の會計と郵便電信の會計と彼此流用を許してる、公衆待合室の窓口で爲替や貯金の現金拂渡請求が出來る、これに充當せらるゝ資金として鐵道切符賣下げによる收入の現金が流用されるのである。一方で受入れた過超の鐵道收入は鐵道收入で金庫へ運んで出る、一方で爲替や貯金の支拂準備金として餘分の金を寢かしたり、不足だからとてわざ〳〵資金をとりよせ運び入れるといふ事は、無駄である不便である重複である不經濟であるからである、此意味を以てなによりも鐵道の驛長さんは同時に郵便局長さんを兼任してる。

建物の經濟、仕事の經濟、事務の簡捷、公衆の利便、曰く何、曰く何、さうした點を考へた歐米から我邦の仕事振りを見ると、いづれの方面もそれ〴〵に繩張りをきめて、その中ではかなり緊張もし努力もしてるやうだが、どうも相互の聯絡といふ事が不充分である、どうも眼のつけどころが近い低い。

どうしたら不經濟になるだらう、どうしたら公衆に不便を增しうるだらう、などゝ



考へ拔いた苦心の結果でない事はよう分つてゐる、しかし結果が似たものになつてゐるから困る。

梅田の驛も今度改築されると、まさか再びこんな世間ばなれした藝當も演じなからうか……今日まで長の年月かうした不便さに馴れつこになつてゐる公衆に付ても考へさせられる、否、汽車の中でも待合室でも、たゞしやべつたりむしや〳〵喰つたり居眠つたりするばかりを本藝とするお客さんの多過ぎる事も事實である。

しかし筆不性な國民だからといふて、さうした利便の途を開くの要なしとて之を塞いで仕舞ふと、餘計に不性者になつて仕舞ふ、デスクなりインキなりおいてあれば、つゐペンをとつて見ようといふ心持になる、待合室の眼の前に郵便の窓口がある。電信の窓口がある、門前の子も習はぬ經を讀むだらうぢやないか。（昭三、一一、公民講座）

# 坐禪帶と楚人冠

## 上、坐禪帶念入り僞造

樂屋落ちで少々恐れ入るが……坐禪帶の念入り僞造といふて、緣切り地藏と早合點すべからず。

埼玉縣北足立郡のなにがしから手紙が來た、木原鬼佛先生の住所を知らせてくれといふのである。

書面によると鬼佛先生は、心靈哲學會なるものをおこし、坐禪帶養生法と題せる書を著してある。そこでその先生の住所を知りたいのは、其坐禪帶の製法を知りたいからで、もし製法御承知ならばどうか御知らせ下さいと付記してある。しかし僕は興津鯛は干物でたべたが坐禪帶に至りては煑て喰ふやら燒いて喰ふやら、越中ふんどしさへしめない、兵兒帶もぐる〳〵とだら〳〵と腹ではない、腰のへんに怪しく卷きつける流儀だから、何んの事かてんで見當がつかない。つかないどころかその鬼佛とか金佛とかいふ人の顏も知らぬ名も知らぬ。

それならなんでそんな事を僕に賴みに來たかといふと、その本のはじめに僕の題詞があるからである、永平悟由禪師の「至誠感神」といふ題字と背中合せに石版刷になつたのが、退引ならぬ證據として封入されてある。その題詞に曰く

下等の器械なれば時々油をさすを怠るなかれ

于戈將に納まらんとす夏

紀淡海上に會す

木原研北　飛峯住　宏　Shimomura

僕も無斷でいろ〳〵名前を僞造濫用せられるが、石版刷の題詞にまで僞造せられたのをまざ〳〵と見せられたのはこれが始めてゞある。

題詞の下に下村宏閣下と活字で印刷されてあるから正しく僕の事に相違ない、なによりもなさけないのは文句が丸でなつてない、夢にも及びもつかぬ文句である、又「飛峯住」といふ飛峯とは何んの事だらう、これも分らぬ、それよりも拙劣な横文字でShimomuraとさいんしてあるに至つては抱腹絶倒である、そこで僕ははゝあこれは誰かこの鬼佛先生から賴まれて、まやかしものを僕の直筆と號してはめ込んだのだなと解釋しやうとしたが、そこにはあり〳〵と「紀淡海上に會す」と書いてある、僕は此時分紀淡海上を航海した事もなく、鬼佛やらいふ人に遇つた覺えもない、僞造もここまであくどく出來上るとむしろ滑稽であるが、只滑稽だとばかりでゲタゲタ笑ふても居られない。

さらにそのなにがしと書面を往復したが、醫學博士水尾源太郎といふ人の序文もある、さうした博士がもしあらば尋ねて見やうと思ふが、悟由禪師の題字も眉唾ものかも知れない、坐禪豆ならおなじみだが何分坐禪帶といふのは一向聞いてゐなかつた、



人を馬鹿にしてるにも程がある。

## 下、楚人冠物故

も一つ序でに樂屋落の一節……楚人冠物故の件につき。

東京朝日の樓上で經濟部の牧野君が「これ御覽なさい、中々あなたの評判がよろしいですよ」

とくつ〳〵笑ひながら一通の手紙を見せてくれた、日附は昭和二年六月二十八日差出人は靜岡縣小笠郡横須賀町朝日讀者とある。

大體東京株式の相場欄から物價欄につきこま〳〵と批判や注文がしるされてある、

その末段に、

貴紙に海南と署名ある記事時に散見す、其文章に何等の奇なきも其著想毫緻の溫健精博なるは敬服に値す、加之筆端能く人を魅するの力は、先年物故されたる名

記者楚人冠氏を超えんか、之は海南氏の論經濟界に通ぜらるゝに因らん、兎に角「實生活社會に無くてならぬ記者」と愚案す、然るに日毎に筆を採らるゝ役向に非ざるか、此人の玉篇を紙上に拜する數甚少きを憾とす、希くば貴所に於ても如此人を重用し格勵執筆されん事を望む。

これから經濟通の讀者だけに筆が肥料の公平なる分配ではなかつた、肥土を以て海南を律してゐる、曰く

餘談ながら地方沼澤の傍などに動物植物の腐りて極めて有益なる肥料となり土塊に埋もるゝあり、之を「肥土」と稱し、農家の尊重する所なり、今海南氏を此肥土に比較するは不倫なれども、一ケ月數回は執筆せられん事を希望の至に不堪候、右物價欄及海南氏に關する件は老生一己の希望に非ず同鄕數輩の願意に御座候。閣下々々と無暗にはやし立てゝ石版刷題詞にまで僞造せられるよりも、知らぬものは知らぬでよい、その知らぬ人から肥土なみにほめられるのは、臭いながらも、惡い



氣はしない、が何よりも痛快なは楚人冠の物故である、早速楚人冠に

「おいお前は物故してるよ！」

といふと

「うん、見た……おれを物故はひどいなあ……おれはあの男は物故の意味を取りちがえてるのかも知れんと思ふてる」

「取りちがへてる？」

「物故といふ事は退社とでも思ふてゐるのではなからうか」

それから間もなく楚人冠の處女小說「うるさき人々」が東京朝日に連載せられた。そこで今にも此ほど楚人冠先生物故としるして失禮しましたといふやうな手紙がくるかも知れぬと當てにせずに待つてゐるがまだ來ない。（昭三、一一、八、關西文藝）

# にきび野郎

## 上、お伊勢參り

見たところはや六十路をこえたお爺さんとお婆さんが、十四五の年配だから孫さんだらう、にきび澤山のいかにも才はじけたつらがまへの若いのをつれて、外宮さんの參拜をすまして伊勢音頭の油屋おこんで名を賣つた古市も、お杉お玉でおなじみの相の山もあとに、はや内宮前の宇治橋に近かくなつたころ、往還の右側に黑い大きな冠木門の一と構への前に來た。

爺さんは孫さんに

「俊夫これは師範學校かね？」

と問ひかけたら、

「神宮司廳と書いてあるやないか……師範學校は一縣にたつた一つ縣廳所在地ときまつてる、こゝは三重縣や師範學校は津にしかない、こんなところにあるものやない」



俄に氣色ばんだお爺さんは

「俊夫！　も一度言うて見い！　その口返事はなんぢや……お爺さんは無學ぢや、お爺さんの時分には學校も無かつた、今時の事がわからんから、おまへを道案内につれて來たのぢや、それに何んぢやその口のきゝざまは！」

あとはどもつてお爺さんの眼には怒り涙が一杯になつてゐた、あんまりな俊夫だとお婆さんまで涙聲になつて、

「俊夫お前なんといふ口答へをするのだえ、お前をこゝまで育て上げた苦勞が分らないかえ、お前を苦しい中から學校に入れてるのは何んの爲だえ」

と横から口を出した。

いかさま此場合お爺さんの問には

「お爺さん神宮司廳といふ看板がかゝつてゐるから、内宮さんと外宮さんの社務所見

たいな處でしようね」

といへばそれでよろしい、「神宮司廳と書いてあるやないか」は穩當でない、況んや「師範學校は一縣にたつた一つ縣廳所在地ときまつてる」は餘計な事だ、「こゝは三重縣や師範學校は津にしかない、こんなところにあるもんやない」に至りては餘計を通り越して生意氣千萬である。

さすがの若造もこいつは惡かつたとおもつたか、只一言もなく面伏になつて一面にきびを繁殖した顏を眞つ赤にしてさしうつむいた。

## 下、熱海から箱根へ

それから三四年後の話である、梅の花のほころびそめた冬のある朝、小田原から熱海へ二臺の車が伊豆の海に沿ふ坂路をうね〳〵と登つては降る降つては登る、登りのときには霜柱を踏んで車の後押をしてゐる若い男は、大分ひねてはきたが紛れもない



お伊勢參りの時のにきび野郎俊夫である、その一臺の車上の婦人は俊夫のお婆さんだがあとの一臺の車にはお爺さんでなくて同じ年輩の婦人が乘つてゐる、どうやら隱居友達と見える。それから四五日後の事である、小雨降りしきる中を二挺の山かごが湯本から底倉へ登つてゆく、菅笠で桐油をまとふてゐる草鞋ばきの男が、そのかごのあとになり先になり、かごの中なる客人の話相手になつてゐるらしい。

大平臺の茶店で一と休みとあつてかごをおろす、雨道とて履物に不自由と見え、笠をとり桐油をぬいだ男は、かごのたれをあげて中なる客人を脊にし茶店へ運んでゆく

「お婆さん生憎の雨でたれをおろしてしまうてうつとうしかつたでしよう、天氣だとこゝから伊豆の海も見えて景色が好いのですが、まあ草臥たでしよう一と休みして下さい。」

と云ふはまさしく俊夫であり、脊よりおりたのがお婆さんであつたが、俊夫の詞にいらへもなくてお婆さんがさしうつむいたまゝ涙ぐんでゐる、眼ざとくもそれを見た俊

夫はびつくりして、

「お婆さんどうしました、何かお氣にさはつた事でもありましたか？」

といはれてお婆さんは

「勿體ない〳〵なんで氣にさはりませう、此間うちからあんまりお前が親切にしてくれるので、つゐ……」

といひも終らずせき止めかねたかお婆さんははら〳〵と涙をこぼした。

「お婆さん私は高等學校の寄宿舍には入つて始めて他人の飯をたべました、今まで我ながら小憎らしい生意氣な自分がはつきりとわかりました、お婆さんは覺えてもゐますまいが、お爺さんとお婆さんにお伴してお伊勢さんにお參りした時、忘れもしない神宮司廳の前で、私の不心得からお二人を泣かした事がありました、今度の旅こそ私はあの時の罪の償ひと、まあ足らぬながらも心持だけは精一杯にやつてます、今お婆さんにさうおつしやつて貰ふてこんな嬉しい事はありません、只お爺さんが亡くなつて今度お供の出來なかつたのが何よりも殘念に思ひます。」



俊夫の涙ながらの述懷にお婆さんはたまりかねたか止め度もなく泣き崩れた、連れのお婆さんも貰ひ泣に、はんけちを顔にあてゝうつぶした。

× × × × ×

此伊勢參りは明治廿一年頃でもあつたらうか、東海道の汽車はまだ通じてない、横濱から忘れもせぬ外ぐるまの船で四日市へ、それから又小蒸汽に乘りかへて神社といふ港といへば港見たような處へ沖がかりとなつて上陸、夫から宇治の山田にたどり着いた頃の話である。其にきび野郎の俊夫といふのは誰の事と思ふ？」（二、一一、一五

文化生活）

# 死花物語

諸君知獵乎、逐殺獸者狗也、發縱指示者人也、諸君徒能得走獸耳、功狗也、至如蕭何、功人也。

甲「之は漢の高祖の群臣に話した詞として傳へられてる、諸君は功狗なりはひどいね。彼の韓信などはその功狗の尤も優なるもので、遂に功狗が煮られたのだからな！」

乙「働き損の草臥もうけといふが、働き損の首ちよん斬られなどはかんしんしないね。」

甲「その代り韓信の方が蕭何よりずつと名が賣れてる。」

乙「せうか知らん、しかしちよん斬られては名が賣れてもせうがないね。」

甲「本人が自分の生きてる間だけ見つめたらさうでもあらう、しかし本人だけが品定めして、それでよしとばかりもいかないね、萬人の見るところ、古今東西に及ぼすところも味はないとね……早い話が無官太夫敦盛君などは、只殺されたゞけで名を殘してる、人買に賣られた梅若丸、これも向島木母寺あたりで殺されて名を殘してる、況んやエライ人に於ておやだね。」

乙「さうすると名が殘らないと駄目だといふのかね？」

甲「さうぢやない、まあ美名もあり醜名もあらうが、由來人間には燒餅性がある、だから氣の毒な目に遇ふとそれだけに世間から同情の聲がつきまとつてゆく、それへ文筆の人などが提灯でもつけると大變な事になるね。」

乙「といふと？」

甲「菅丞相を見なさいあの天神さんを見なさい、太宰府あの二日市溫泉場に湯治してあの始末だ、同じ鬼界島へ流されても俊寛を見なさい、成經康賴は恩赦に遇ふ獨りぽつちに殘されるとあの通りだ、だから五郎判官義經とか西鄕隆盛あたりになると素的だね。」

乙「つまり同情だらうが、いくら同情されても俊寛は感心せんね。」

甲「さあ同情とも見られやう、だから星亨でも原敬でも死花を咲かしたのだ、原敬だつて存命してゐて、いつまでも政權を握りつゞけてをれるとでもいふのか、絶對過半數を占めてゐ政友會は、果してどこまで持ちこたへうるのであらうか、あの板垣退助老はどうだ、岐阜の變に「板垣死すとも自由は死せず」と叫んだまゝ斃れたなら、とても詩的だ定めし死花がうんと見事に咲いたゞらう。さうなつて見ると伊藤博文などいふ人は千古いや萬古に得がたき維新の日本に生まれ合せ、明治七年七月七日に出來上つた地方官會議の議長を手はじめに、翌年七月三日にできた法制局の最初の長官、十四年十月二十一日にできた參事院の最初の議長、明治十八年十二月二十二日太政官が內閣となつて最初の總理大臣最初の宮內大臣、それからは樞密院ができる。最初の議長、最後が韓國の最初の統監と、苟くも初物といふ初物はみなお先へ失敬する、憲法の制定に條約の改正に、日清日露の戰役に、日本の黃金時代



の大舞臺であらゆる立役をぶつ通して、最後が場所もハルピン敵手が鮮人で安重根……しかも一と思ひに息の根が絶える、おまけにおとしはすでに六十有九歳だから、まあなんともかともたとへやうのない好い月日の下にめぐり合せたか、とてもかうしたうらやむべき人はどこにもない、馬援であつたか

大丈夫當以馬革裹屍、安能死兒女子手。

と反身になつたが、實際山縣、大山、川上、桂、兒玉、寺內なんどの諸將軍は身は武人としてみな疊の上で死んだ、伊藤春畝は文官を以て滿洲原頭の露と消えた、とても羨ましい限りぢやないか。名が殘るといふ事は生命の延長なりとせばその名は疊の上の病死ではね……」

乙「楠廷尉の湊川正行の四條畷などがそのいゝ手本でしようね？」

甲「さうとも！　それに會津の白虎隊などは朝敵といふ上から見れば違法を通り越してるかも知れぬ、しかしまあ之れは戰である、大石良雄等赤穗四十七士に至りては

明かに御法度にふれたればこそ切腹だ、しかしいづれも其芳名は千古に亡びずで、飯盛山や泉岳寺の墓前には香煙が絶たない、忠臣義士の世間に與へた感化はとても深くかつ長い。」

乙「第一義士のおかげで飯を喰つてるものだけでも素的でせう。」

甲「それも一と思ひに切腹でよかつた、助命になる世間から大に持てる、中には酒亂もあらう借り倒しもあらう、刀物三昧もあらう、數が多いだけに終りを全せぬものもないといへぬ。」

乙「切腹になつて生命は不朽に延長されたわけですね。」

甲「近頃松代藩の恩田木工の傳をよむと、同じ家老でもこの方は主君が明君で充分に腕を揮へたから、松代の藩政改革があまり手際よくでき上つて、今日では名が殘つて居らぬ、同じ松代でも佐久間象山や松井須磨子には遙に及ばないね、昔の唐の魏徵は臣をして良臣たらしめよ忠臣たらしむるなかれといふたが……」



乙「良臣になるのもよしあしですかね。」

甲「さあ赤穂の義士でも佐倉の宗五郎でも、たしかに法規を超越してる、もと〳〵複雜な世の中の團體生活に準繩がなくてはならぬ、しかし時にはその準繩を破るとはいはぬが、超越するなにものかがある、しかもその多くは死を背景としてゐるね。」

（昭二、一〇、一文化生活）

# 或る一家心中

七月の或る新聞に濱松電話として、

池に飛込んで

親子四人心中

醜い己れの姿を呪ふた父が子供に因果をふくめて

といふ見出しで、次のやうな記事をのせてあつた。

靜岡縣磐田郡笠西村豐澤二軒屋、資産家井谷松太郎(三六)は妻きく(三五)長男新一(一三)長女なか(九)の三名を伴ひ、十七日未明同村愛野上伊勢灣溜池に投身親子心中を圖り、松太郎と二兒は溺死したが、きくは袋井町山田醫師の手當の結果、一命を取止めた、見付署では、檢事局と打合せの上きくを我子殺しの殺人犯として取調べる事となつたが、心中の原因について松太郎が三年前から遺傳梅毒のため關節炎を起し、身體の自由を缺き、全身に吹出物を生じて、宛ら癩病患者の如く醜い姿となつたので悲觀の結果死を覺悟したもので、死んだ二人の子供は同村小學校に在學して親孝行者として級中の模範となつてゐた。二兒が兩親に伴はれて死出の旅に出る際殘した連名の辭世には、

『父母と共に手を執り死出の旅蕾の花と散るうれしさ』

と涙にしめる鉛筆の亂れ書きがあり、通夜した村民等は、新に涙を催してゐた。

世の中には法律規則といふものが出來上つてゐて、それ〴〵惡い事をすると制裁がつきまとふ。また法規の網に洩れたにしてが社會的に何等かの報がある。よくめぐる因果の小車だとか、困果應報だとかいふて、『それみなはれ爭はれんものやな』、と眼を聳てる事が少くない。とはいへまだ人間の頭で考へると、どうも此の世の中では、二二が四と算盤が、きつちり合ふてくれぬ事が多い。これを『飛鳥川水の流れと人の身は』とうたひ、有爲轉變とも諸行無常ともいふ。どうしても、現世だけでは差引勘定清

算がつかぬ。そこで佛法などでは過去現在未來と三世因果で說く事になつてゐる。さりとて三世因果により前世の惡業がつきまとふてゐるといへばそれまでだが、前世に惡業をした者はよいとして、現世でそのお尻をふかせられるのは恐縮千萬である。

自分が酒癖で、アルコール中毒となり、フラ〳〵で中氣になるのもよろしいかも知れぬ。自分が女道樂で猛烈な梅毒となり、鼻の障子がはづれて仕舞ふても、本人としては夏向は涼しくて、よろふいといふかも知れぬ。がそのアル中や、三期梅毒の連中が不用意に、性慾の滿足か衝動か知らぬが、婦人に接したとする、懷姙する。生み落した子供にアル中や梅毒が遺傳となる胎兒中傳染される、正に因果關係で仕方がないとして、何んにも知らずに生み落された子供の身になると、實以て災難である。

天刑病やアル中や梅毒や精神病で、自分が數々苦しみ拔いたから、一つ子供をひり出して、その子供にもおれのやうな、つらい目にあはしてやる？　まさかそんな馬鹿な、とてつもない考へを持つ者もなからうが、只極めて不用意に無邪氣に不注意に不





謹愼にさうした結果を生み出す。あとでぬきさしできぬ不幸の種を蒔く、つまり智慧が足りぬ思慮が淺い計りに、泣くにも泣かれぬ憂い目を、子供にも亦自分にもなめる事となる。

自殺といふ事は尤も忌むべき事である。たしか獨逸であつたか醫師會で、病人が絕對に助からぬ、しかも非常な苦痛を訴へる、さうしたときは愼重に然るべき手段をとつた上、命をちゞめる事を法の力で認めてほしいといふ提案を決議した事もあつたやうに聞いてる。實際不治の病に罹り、病苦や貧苦と戰ふて、猶生きて居らねばならぬといふ事は、人生悲慘の極である。

僕は自殺否認論者であるが、此新聞記事を見て遺傳梅毒で癩病患者の樣になつた本人としては、自殺の決意には同情を表せずには居られない。同時に又自分が遺傳梅毒であつたゞけに、同じ憂き目を子供達に見せしむるに忍びないと、一家心中を企てた親心にも、同情を表せずには居られない。全く此の一家心中は近頃流行の、一家心

中とは、同じ心中でも心中がちがふ。

一體なれば、その子達に病毒遺傳のあるといふことから性教育を與へて、成人後よしんば性慾は滿足するにしてが、堅く將來の生殖を遠慮するやうに仕つけることも考へさせられる、メンデリズム以來、やれ單性雜種の兩性雜種の三性雜種の、やれ父親から母親から、いやお爺さんからお婆さんからと、遺傳の手順も中々手が込んで、さう簡單に樂觀も出來ねば悲觀も出來ぬ。もし遺傳病が出てくるとしてがその發病に先だち、あらゆる驅毒法を講ずる。さうした事が既に生れた子供に對する理づめの方法かも知れぬが、それよりも、考へさせられる事は、さうした遺傳のある以上はじめから子供を生まぬやうに心がけておく事である。

悪質者を驅逐し、國民全體の健康が增進する、平均壽命が延長する。そこに社會の福祉と平和がある。今日新聞の社會記事にヤレ人殺し、ヤレ猫入らず、ヤレ首くゝり ヤレ火付けとあらゆる罪悪が、精神界に、物質界に、汚毒と、損害を流しつつある。



そのうしにろは弱體病體といふものが、背中合せになつてる事を忘れてはならぬ。百利を興すもよいが、一害を除く事はより肝要である。

それだけに此の新聞の一記事を見て讀者がそれ〴〵三省してほしい、たゞ氣の毒やなあ位で看過して貰ふては困る。(二、八、一五優生運動)

落穂集（六番茶）終

昭和四年七月廿一日印刷
昭和四年七月廿五日發行

落穂集（六番茶）……奥付
正價金壹圓八拾錢

著者　下村宏

東京市日本橋區本石町三丁目十六番地
發行者　株式會社博文館
右代表者取締役社長　大橋勇吉

東京市小石川區久堅町百〇八番地
印刷者　君島潔

共同印刷株式會社印刷

不許複製

發行所　東京市日本橋區本石町　株式會社　博文館
振替口座東京二四〇番

# 下村海南博士著書目錄

**博文館出版**

四番茶　昭和二年　定價二・〇〇　送料〇・〇八

五番茶　昭和三年　定價一・〇八　送料〇・〇八

落穗集（六番茶）　昭和四年　定價一・〇八　送料〇・〇八

海南歌集　近刊

歐米より故國を　大正十一年　定價二・八〇（丁未出版社）

歌集芭蕉の葉蔭　大正十年　定價一・四〇（聚芳閣）

新聞に入りて　大正十四年　定價三・〇〇（日本評論社）

思ひ出草（一白の巻）　大正十五年　定價一・八〇（同）

思ひ出草（二黑の巻）　昭和三年　定價一・八〇（同）

財政讀本　大正十五年　定價一・二〇（同）

皮肉と　昭和二年　定價二・三〇（同）

朝日常識講座　人口問題　昭和三年　非賣品（朝日新聞社）

鯖を讀む話　近刊（日本評論社）

行づまり近刊（同）

**絕版**

財政學

貯蓄機關論

富と貯蓄

貯蓄と國民性

郵便法規要義

南紀人對論

日本民族の將來

朝日講演集（第五集）

# 田山花袋著

**京阪**

## 一日の行樂

京都大阪を中心に手近の旅行地は極めて多い、それを一々實際的にまた藝術的に描き出された案内記として唯一の好著。

三六判布表紙
洋裝函入美本
正價金貳圓五拾錢
送料十錢

**東京近郊**

## 一日の行樂

東京を中心に近郊近縣に一日二日の樂しい小旅行を試みやうとする人達に無二の相談相手、花袋氏の名筆机上で讀むだけでも快い。

三六判布表紙
洋裝函入美本
正價金貳圓五拾錢
送料十錢

笹川臨風著◇大町桂月著

## 改訂 趣味の旅 古跡めぐり

輕妙の筆致と觀察の奇警と相俟つて、全國の古跡を紹介す、旅情を豊かにすべき風懷すべて此一書の中にあるを思はしむ。

袖珍判クロース
表紙函入美本
正價 金壹圓六拾錢
送料 六錢

## 改訂增補 山水めぐり

行歩全國に遍れぎ桂月先生が、天下に知らるゝ事と隱れたるを問はず各地山水の景勝をその達意明暢の筆に紹介せる好著。

袖珍判クロース
表紙函入美本
正價 金壹圓六拾錢
送料 八錢

齋藤隆三著◇藤澤衛彦著

## 趣味の旅 古社寺をたづねて

京都と奈良はいはずものこと或は鎌倉、或は東京、東は中尊寺に及び西は太宰府に至るまで其間にある古社大寺を最近に訪れ廻つた見聞記であり感想錄である。

酒井三良畫伯裝幀
袖珍判函入極美本
四百三十頁挿畫豊富
正價 金壹圓六拾錢
送料 六錢

## 趣味の旅 傳說をたづねて

各時代に移異なる民間演說法の床しさを尋れ、僻村の爐邊に零聞瑣談を究め此民族のみに惠まれた傳說の種々相に興趣の盡きるなさを懷しむ。趣味的讀物中の逸品。

池田永治畫伯裝幀
袖珍判函入極美本
四百七十頁挿畫豊富
正價 金壹圓六拾錢
送料 六錢

法學博士　下村海南著

## 四番茶

東京朝日專務として東奔西走寧日なき間に筆をとれる趣味深き隨筆集。ジヤーナリストの眼に映ずる犀利な觀察と機警なる題目間轉滑脫の鮮やかな筆致は讀書子を魅了せん。

池田永治畫伯裝幀
菊半截總布裝
五百頁口繪澤山
正價金貳圓
送料八錢

## 五番茶

好評を拍したる「四番茶」の續篇、モナコ、カフエーセジノ、信濃紀行五番茶を初め旋風、旅役者の群に終る長短約四十餘篇、例に依り隨筆あり、短歌あり、奇しきロマンスあり趣味深き讀物である。

池田永治伯畫裝幀
菊半截絹布裝
四百頁口繪澤山
正價金壹圓八拾錢
送料八錢

文學博士　佐佐木信綱著

## 抄釋 袖珍萬葉集

兎角難解にして近づき難いものと思はれた萬葉集を、斯くまで現代人に適する樣解說されたものは稀である。文學に志す人は勿論、一般現代人の必讀すべき良著である。

袖珍判總布裝
三百六十六頁
口繪三色版一葉
寫眞版三葉
正價金壹圓四拾錢
送料六錢

## 和歌名所めぐり

吾國古今の名所に關する古人今人の作を汽車の沿線汽船の航路の順序に編纂して說明を加へ且臺灣、朝鮮、南洋、歐米の名勝の和歌をも網羅し、所謂居ながらにして日本及各國の名所を巡り得べきもの家庭の好讀物、また作歌の好參考書なり

新形洋裝美本
紙數四三五頁
正價金壹圓六拾錢
送料六錢

# 松川二郎著

趣味の旅

## 民謡をたづねて

乙女心そのものゝ現れかと思はるゝ純情的な牧歌……大島節……平凡な中に云ひ知れぬ味のある……磯節等、全國の民謡といふ民謡の代表的なもの總てを集めた社會的、趣味的、文學的に最も價値のある著書である。

池田永治畫伯裝幀
袖珍判上裝函入
紙數五百頁挿圖澤山
正價金壹圓六拾錢
送料六錢

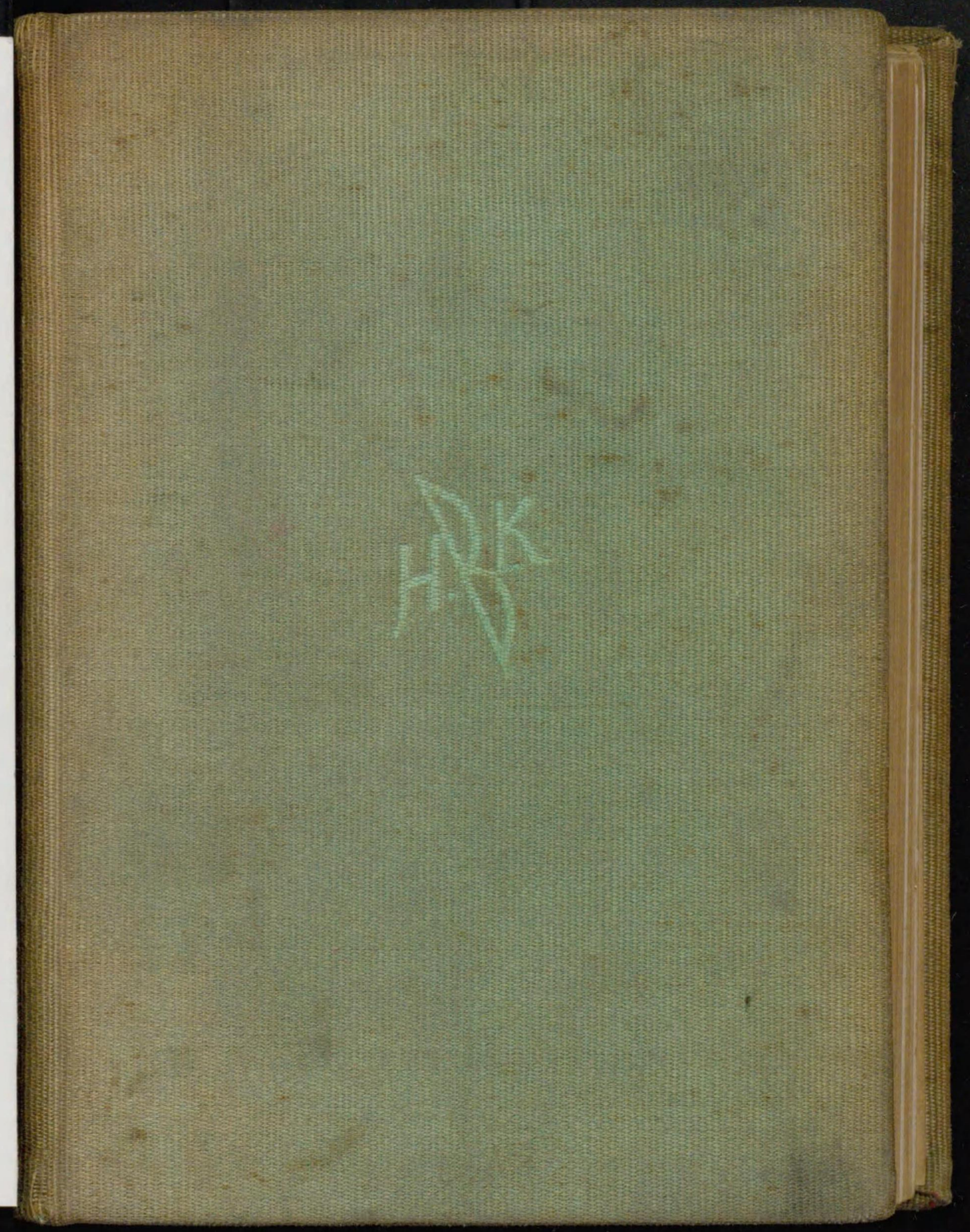
趣味の旅

## 名物をたづねて

所かはれば品かはる。旅する人に、土地の名物ほど、心を惹き、慰めとなるものはない。本書は日本全國の名物について詳しく面白く、書かれたものである。

池田永治畫伯裝幀
袖珍判上製函入
紙數五百頁挿畫澤山
正價金壹圓六拾錢
送料六錢

569
176



**Kodak** Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

**Kodak** Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black